

勝鬘宝窟の行道体系について

鶴 見 良 道

嘉祥大師吉藏（五四九～六二三）は、天台大師智顗（五三八～五九七）のように『摩訶止観』や『菩薩戒義疏』の如き、まとまつた形での行や戒についての著作を残していないのは周知の如くであろう。従つて吉藏が行、特に主題に掲げる如き行道について考察するには、吉藏自身の現存する著作中から行に関する記述を見出し、吉藏の行道観を考察するよりないと考えるのである。この小論では、その点より『勝鬘経』の経説中、特に行及び戒を説くとされる「十大受」「三大願」「摂受正法」を中心として、吉藏が註釈を加える『勝鬘宝窟』において行道体系をどのように展開させているかを考察してみたい。

吉藏は、仏道の行道体系を示して乗の三義や正法の四位をもつて説明するのである。正法の四位について吉藏は、『勝鬘宝窟』に

通是一正法。法法不同。凡有四種。一理。二行。三果。四教。理者諸法実相理。如実相理而修行。故有行正法也。行満得果。故次

勝鬘宝窟の行道体系について（鶴 見）

明果。前三為自徳。教正法者即化他。此四摂一切正法尽。初言广大者。謂理正法也。次言無量者行正法也。得一切仏法者果正法也。八万四千者教正法也。今標此四門。後次第解釈也。又前三句即是乘三義。理正法是乗性也。行正法即乗随也。果正法即乗得也。教正法為他說乗三也。（T 37・29c）

と説き、正法は一切の言語を遠離して権実境智を説かず寂滅の相であるとし、不二義不二義の相即義として説明される「仏法の大宗」からすれば一正法のみであるが、正法の実践としての仏道の行道体系からすれば、理、行、果、教の四正法として説明するのである。理正法とは諸法実相の理のこととで、実相の理の如く修行することが行正法であり、修行が満じて仏果菩提を得る。これが果正法である。そして、果正法即ち仏果菩提によつて教正法である化他の法門が説かれるとして、仏法の行道体系を四位で論ずるのである。

乗の三義については、『勝鬘宝窟』に

失乗三義者。乗有三種。謂乗性乗随乗得。忘失正法者。謂失乗

性。乗性即是実相理。忘失正法則失大乘者。第二明失乘得。乘得即是乘果。乘由実相理成。既忘失実相則忘失大乘也。忘大乘則忘諸波羅蜜者。第三忘失乘隨。乘隨謂因也。以隨順実相以修諸度故。以諸度故名曰乘隨。

(T・37・24b)

と説き、『勝鬘經』の「十大受」における

忘失法者則忘大乘。忘大乘者則忘波羅蜜。

(T 12・217c)

の一文を『十二門論』に説かれる所の乗の三義を配当して解釈を加えるのである。吉藏は、正法を乗性即ち諸法実相の理とし、正法即ち実相の理を失すれば乗得即ち乗果を失すと説き、乗果とは実相の理によって成ずる所の仏果菩提であるとするのである。そして、仏果を失すると言うことは、乗隨即ち実相の理に隨順して行ずる諸波羅蜜の因行を失することであるとして、行道の次第を乗性、乗隨、乗得の關係で説き、正法の四位に配当すれば理正法は乗性、行正法は乗隨、果正法は乗得、教正法は為他說乗三となるとするのである。

行道体系において理正法と果正法との關係を結ぶのは行正法であり、仏道修行はこの行正法の実践にほかならないのである。吉藏も「同じく仏性有り」と雖ども、要す須らく菩提心を発し、方に作仏を得べし。発さざれば則ち作仏を得ず。」(T 37・42c)として、如來感が一切衆生に内在され悟への因として在纏位の法身と定義されても、それはあくまで如來の立場より衆生に向けられる方向性において、如來にのみ有仏性

と認められるものである。故に吉藏は、如來によって説かれる有仏性を信じ菩提心を発し、菩薩行を修すべきであると説き、発心しない所にどうして作仏があらうかとして行道を強調するのである。

吉藏は、行道の段階を説明して『勝鬘寶窟』に

若約位論者。忘失大乘。謂忘失仏果。忘失諸一切波羅蜜。則忘失十地。於大乘不欲。則無內凡三十心。於正法不欲。則無外凡十信。此四攝一切位尽。從本以至末也。此四位得成者。約正法実相觀明晦故。有四種階位。故忘失正法。失此四位。後授受正法中亦明四位。謂廣大無量得一切佛法八万四千。今之四位。即是後四中則是無量及得一切佛法之二位也。今之大乘即後得一切佛法。今之波羅蜜及二欲。此三位並攝入後之無量。

(T 37・24c)

と説き、『勝鬘經』の「十大受」における

忘失法則忘大乘。忘大乘者則忘波羅蜜。忘波羅蜜者則不欲大乘。若菩薩不決定大乘者則不能得授受正法欲。

(T 12・217c)

の一文を解釈して、正法を忘れることは大乘を忘れることで、大乘を忘失することは果としての仏果菩提を忘失することとなり、仏果として的大乗を忘れることは、仏果への行である波羅蜜を忘れることであると説くのである。そして、その行位を説いて、一切の菩薩行である波羅蜜を忘れることは、行位における十地の階位を失することであり、仏果として的大乗を欲しないのならば内凡の三十心即ち三賢位を失し、正法

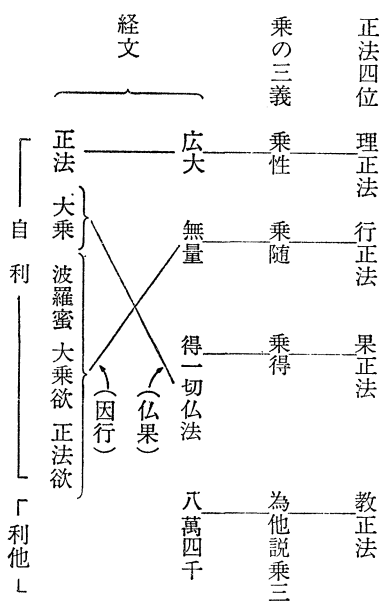
欲即ち仏法への信すら起さないならば外凡の十信位もないとして、諸法実相の理即ち正法を根底にして大乘、波羅蜜、大乘欲、正法欲の四位によって行と果との関係が摂じ尽されるところのである。そして、吉蔵は

不忘正法。便能超凡。即初地也。

(T・37・27c)

と『勝鬘宝窟』に説き、すべての因としての行の始めである正法欲を起さないならば十信位をもないが、正法を忘れないとする心を発し、大乘への行を修せば、凡夫地を越え、初地の階位にあると吉蔵は、行道の階位を説くのである。

吉蔵は、「正法実相観の明晦に約するが故に四種の階位有り」として、『勝鬘経』の「摂受正法」の段に説かれる



勝鬘宝窟の行道体系について（鶴見）

勝鬘白仏。摂受正法廣大義者。則是無量。得一切佛法。摂八万四千法門。
(T 12・28a)

の一文の廣大、無量、得一切佛法、八万四千の四門を正法の四位即ち理、行、果、教に配当して、その行道体系を示し、吉蔵が『勝鬘宝窟』に説く行道体系を図式化すれば上段左の図の如くなる。

吉蔵は、「勝鬘、無名相中に於て、衆生の為の故に仮名相を以て言に寄て標顯す。」(T 37・27c)と説き、無所得正観による中道実相の正法こそ『勝鬘経』が説かんとした根本妙理であるとするのである。そして、吉蔵は、すべての至理は一切の言語を遠離した諸法実相即ち無名相であるが、衆生のために仮名相をもちいて宗要を示し、正法を四種に展開してその正法の実践体系を説き示すのであり、以上の考察から吉蔵が、『勝鬘宝窟』に説く行道体系の一端が明らかになつたことと思われる。
(註記省略)